＜前回：旧約聖書と平和の問題＞

（１）預言者の思想　→　民族宗教から普遍宗教へ、グローバル化の先取り

13．社会正義：正義の神、不正・悪が滅亡の原因となる。民族から正義ではなく。

＜アモス２＞

6 主はこう言われる。イスラエルの三つの罪、四つの罪のゆえに、わたしは決して赦さない。彼らが正しい者を金で、貧しい者を靴一足の値で売ったからだ。7 彼らは弱い者の頭を地の塵に踏みつけ、悩む者の道を曲げている。父も子も同じ女のもとに通い、わたしの聖なる名を汚している。8 祭壇のあるところではどこでも、その傍らに質にとった衣を広げ、科料として取り立てたぶどう酒を、神殿の中で飲んでいる。

14．排他的民族主義の克服

1) 古代イスラエルの宗教＝民族宗教、選民思想

・民族の救いとしての歴史・終末

ダビデ王家の再建　→　救世主（メシア）はダビデの子孫から生まれる。

→ 2) 旧約聖書預言者における民族主義とその克服

・苦難の僕：民族の相対化と新しい使命の自覚。苦難の意味。→　キリスト教へ

民族の滅亡を通して神の正義の普遍性は実現される。

15．民族宗教から普遍宗教へ（民族宗教自体の内部からそれを乗り越える動きが現れる）

預言者の平和思想、諸民族の神であるヤハウェ、神は他民族を通して意図を実現する。

＜イザヤ２＞

4 主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし／槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず／もはや戦うことを学ばない。5 ヤコブの家よ、主の光の中を歩もう。

（２）旧約聖書は平和的か？

１．「旧約聖書における平和思想」を考える際の難問

戦いの神＝万軍の主と暴力的なイスラエル

２．岩城聰「パレスチナ問題とそれに関わる神学的問題」（京都大学基督教学会・第 21 回学術大会での研究発表。2018.12.1）。

・ナイム・アティーク（Naim Stifan Steek, *A Palestinian Theology of Liberation --- The Bible, Justice and the Palastine-Israel Conflict*, Orbis Books, Maryknoll, New York, 2017.）

３．シオニストによる旧約聖書の恣意的利用を批判するために、アティークは旧約聖書の章句そのものを用いている。

・それは、旧約聖書の中に、排他的部族神的な神観・神学と、包括的な神観・神学とがせめぎ合いつつ存在しており、人間の神認識が一部の人々の神から全ての人々の神へ、戦争の神から平和の神へ、報復と怒りの神から愛と赦しの神へと変化・発展している。

・排他的で好戦的な部族神という思想はすでに旧約聖書自体の中で批判され克服されつつあった。

それは、神ご自身の性格が変化発展したということではなく、人間の側の理解が変化発展したということ。

・「宗教的な観点から見て、女性や子どもが冷酷に殺戮されるときに神は喜ばれるのであろうか。神は本当に、他の民族が食べ物や飲み物を差し出さなかったからといって、その民族に対する怨恨を永久に抱くように人々に求められるだろうか。そのようなテキストを人々が神の言葉であると信じ、神の名において出かけ、それに基づいて多民族を抑圧し殺戮するとき、彼らは神と仲間の人間に対して罪を犯しているのである。」（Ateek, p.53-54）

（３）聖書テキストの二重性

７．旧約聖書の証言の二重性

・左近豊「混沌の記憶と言葉の回復」（福嶋裕子ほか編『3. 11以降の世界と聖書――言葉の回復をめぐって』日本キリスト教団出版局、2016年）。

「エレミヤ書は、危機をくぐり抜けたサバイバーによって保持され編まれた証言（literatures

of　suvival 的側面）であり、反対者に切り裂かれ暖炉の火にくべて焼かれながらも消滅を生き延びた証言の書（the survival of literature 的側面）であり（エレ 36 章）、しかも、その証言内容においても構成において、読者が読み続けること、すなわちその中で生き延びることの難しさに直面させられる「混沌の物語」となっていること（surviving the literature 的側面）も確かである（哀歌、ヨブ記などと同様に）。」（86）

語りと反語り、証言と反証言

８．ライトのパウロ解釈、アティークとの類似性。

９．パウロは聖書のある箇所に依拠した以前の自分自身の立場を、別の聖書の箇所で論駁した。

10．Walter Brueggemann：アティーク、左近、ライト

（４）神の言葉・啓示とはなにか

11．聖書は単純な神の言葉・啓示ではない

・聖書の宗教と存在論的思惟

ティリッヒ『聖書の宗教と存在の問い』（*Biblical Religion and the Search for Ultimate Reality*,1955 in: *Paui Tillich. MainWorks 4*, de Gruyter, 1987。『ティリッヒ著作集４』白水社）。

バルトあるいはバルト主義者が主張するように、宗教には、啓示との対比において、「人間から神への運動」「自己の被造性と有限性を越えて人間を高めようとする悪魔的な試み」（同書、195）として断罪されるべき側面が存在する。その点から言えば、「聖書の」という形容詞が要求するのは「宗教」ではなく、「啓示」であるということになる。しかし、ティリッヒは、これに対して、啓示は人間によって受容されて初めて「啓示」となるのであり、啓示には人間の側の受容――まさにこの受容こそが「啓示の器」としての「宗教」にほかならない――が不可欠である、この点から考えるならば、聖書は神の啓示の書であるのみならず、同時にその啓示を受容した人間による「自分の宗教についての報告」であることがわかる、と主張する。したがって、「聖書の宗教」という問いの立て方は決して不当なものではない。

12．旧約聖書は古代イスラエル民族に対する「神の言葉」それ自体ではなく、古代イスラエル民族がその宗教において受容した「神の言葉」、そして「神の言葉」への宗教的な応答の書である。神と民族との「啓示相関」（Offenbarungskorrelation）。

したがって、旧約聖書には、神の言葉に対するイスラエル民族の逸脱・反抗とこの逸脱・反抗への批判とが、共に含まれる。

平和思想と戦争思想とが含まれ、後者から前者への移行が見られる。

11．ジェンダーから見た旧約聖書

「聖書が正典宗教なるキリスト教の欠かせない資料であることは言うまでもない。ところが、規範となるべき聖書本文が、すでに旧約においては古代パレスチナの族長主義、新約では聖書記者の女性への偏見を深く刻み込んでいるのである。・・・そのことを考えれば、フェミニスト聖書学者が、なぜ執拗に聖書本文の批判的注解にこだわり続けてきたかがわかろうというものだ。つまり女性たちは、聖書の言葉ひとつひとつが女性蔑視につながっているか、つながっているとすればそれがどう差別に発展するかの分析に多大な労力を費やさねばならない。聖書の翻訳は圧倒的に男性の手でなされてきたが、意図的であろうとなかろうと、そこに男の権力イデオロギーが投影されてきた可能性は十分にある。」（栗林輝夫『栗林輝夫セレクション２　アメリカ現代神学の航海図』新教出版社、2018年、47頁）

「第１章　フェミニスト神学からウーマニスト神学へ」

リューサー、フィオレンツァ、デイリー・・・

（１）キリスト教におけるジェンダーの問題

１．宗教における「女性」の二面的位置
　　新宗教における、あるいは伝統宗教における女性。
２．制度レベルとイデオロギーレベルにおける男性中心性
３．キリスト教とフェミニスト神学
　イエスの宗教運動の理念と制度化されたキリスト教会の現実。
４．人間解放という視点：抑圧構造の再生産を越えて、いかにイメージするのか。
　　↓
　源泉に遡って考える。
　　問題：神の国における男女の平等性と教会の階層性。

（２）旧約聖書とフェミニスト的聖書解釈
５．旧約聖書における男性中心主義、家父長制に対して。
６．フィリス・トリブル『フェミニスト視点による聖書読解入門』新教出版社。
・抑圧された女性の記録を取り戻す試み。ミリアムの場合。

＜出エジプト＞
・2:1 レビの家の出のある男が同じレビ人の娘をめとった。2 彼女は身ごもり、男の子を産んだが、その子がかわいかったのを見て、三か月の間隠しておいた。:3　しかし、もはや隠しきれなくなったので、パピルスの籠を用意し、アスファルトとピッチで防水し、その中に男の子を入れ、ナイル河畔の葦の茂みの間に置いた。4 その子の姉が遠くに立って、どうなることかと様子を見ていると、5 そこへ、ファラオの王女が水浴びをしようと川に下りて来た。その間侍女たちは川岸を行き来していた。王女は、葦の茂みの間に籠を見つけたので、仕え女をやって取って来させた。6 開けてみると赤ん坊がおり、しかも男の子で、泣いていた。王女はふびんに思い、「これは、きっと、ヘブライ人の子です」と言った。7　そのとき、その子の姉がファラオの王女に申し出た。「この子に乳を飲ませるヘブライ人の乳母を呼んで参りましょうか。」8　「そうしておくれ」と、王女が頼んだので、娘は早速その子の母を連れて来た。
・15:1　モーセとイスラエルの民は主を賛美してこの歌をうたった。主に向かってわたしは歌おう。主は大いなる威光を現し／馬と乗り手を海に投げ込まれた。2 主はわたしの力、わたしの歌／主はわたしの救いとなってくださった。この方こそわたしの神。わたしは彼をたたえる。わたしの父の神、わたしは彼をあがめる。3 主こそいくさびと、その名は主。4 主はファラオの戦車と軍勢を海に投げ込み／えり抜きの戦士は葦の海に沈んだ。5 深淵が彼らを覆い／彼らは深い底に石のように沈んだ。
・・・
15:20　アロンの姉である女預言者ミリアムが小太鼓を手に取ると、他の女たちも小太鼓を手に持ち、踊りながら彼女の後に続いた。21　ミリアムは彼らの音頭を取って歌った。主に向かって歌え。主は大いなる威光を現し／馬と乗り手を海に投げ込まれた。
＜民数記＞
・12:1 ミリアムとアロンは、モーセがクシュの女性を妻にしていることで彼を非難し、「モーセはクシュの女を妻にしている」と言った。2　彼らは更に言った。「主はモーセを通してのみ語られるというのか。我々を通しても語られるのではないか。」主はこれを聞かれた。3 モーセという人はこの地上のだれにもまさって謙遜であった。4 主は直ちにモーセとアロンとミリアムに言われた。「あなたたちは三人とも、臨在の幕屋の前に出よ。」彼ら三人はそこに出た。5 主は雲の柱のうちにあって降り、幕屋の入り口に立ち、「アロン、ミリアム」と呼ばれた。二人が進み出ると、6　主はこう言われた。「聞け、わたしの言葉を。あなたたちの間に預言者がいれば／主なるわたしは幻によって自らを示し／夢によって彼に語る。7 わたしの僕モーセはそうではない。彼はわたしの家の者すべてに信頼されている。8 口から口へ、わたしは彼と語り合う／あらわに、謎によらずに。主の姿を彼は

仰ぎ見る。あなたたちは何故、畏れもせず／わたしの僕モーセを非難するのか。」9 主は、彼らに対して憤り、去って行かれ、10　雲は幕屋を離れた。そのとき、見よ、ミリアムは重い皮膚病にかかり、雪のように白くなっていた。アロンはミリアムの方を振り向いた。見よ、彼女は重い皮膚病にかかっていた。11 アロンはモーセに言った。「わが主よ。どうか、わたしたちが愚かにも犯した罪の罰をわたしたちに負わせないでください。12　どうか、彼女を、肉が半ば腐って母の胎から出て来た死者のようにしないでください。」13 モーセは主に助けを求めて叫んだ。「神よ、どうか彼女をいやしてください。」14　しかし主は、モーセに言われた。「父親が彼女の顔に唾したとしても、彼女は七日の間恥じて身を慎むではないか。ミリアムを七日の間宿営の外に隔離しなさい。その後、彼女は宿営に戻ることができる。」15 ミリアムは宿営の外に七日の間隔離された。民は、彼女が戻るまで出発しなかった。
・・・
20:1　イスラエルの人々、その共同体全体は、第一の月にツィンの荒れ野に入った。そして、民はカデシュに滞在した。ミリアムはそこで死に、その地に埋葬された。2.さて、そこには共同体に飲ませる水がなかったので、彼ら徒党を組んで、モーセとアロンに逆らった。

７.「モーセ誕生以前にすら、エジプトのファラオに抵抗する女性たちに焦点をあてた物語」「これらの女性たちは、男性たちの指図も助けも得ずに自分たちで行動していきます。
「二人の助産婦」
「ヘブライ人の女性が生まれたばかりの彼女の赤ん坊をバスケットに入れて、河岸の葦の中に置いた」「この赤ん坊の名前の知れない姉」(9)
「この物語の中心にいるのは、無名の姉です。」「物語が続き、出エジプトの事件が進むにつれて、主役を果たしていた彼女やその他の女性たちは姿を消します。モーセやイスラエルの他の男性たちが目立つようになるにつれて、彼女たちは物語から消えていくのです。」(10)
「物語が海に達すると、主役はモーセです。・・・、モーセとイスラエルの男性たちの口に荘厳な歌が上がります。」(11)
「ミリアムのこれらの言葉は、モーセに帰せられている賛美の歌の第一連と合致しています。・・・ミリアムと女性たちのこの小さな物語が保存されていることの意味は何か」、「一見したところミリアムは、モーセに帰せられている長いの詩の第一連を繰り返したかのように読めます。しかし、そうでないかもしれません。一九五〇年代に二人の聖書学者がこの問題について論文を書いています・彼らの議論によれば、・・・歌全体がミリアムとイスラエルの女性たちのものであって、モーセと男性たちのものではなかったということです。」(12)
「男性の聖書編集者たちが、モーセの権威を高めようとする熱心のあまり、・・・彼らはミリアムを完全に取り除くことができなかった。なぜなら、彼女の物語は人々の記憶に深く留められていたのですから。」
「フェミニスト解釈はこの長い歌をミリアムのものとして取り戻します。」(13)
「彼女は強い指導者であったが、ゆえにその代価を払う羽目になっています。男性の中には、女性たちがリードすることを欲せず、自らの見解を支持するために神すらも引き合いに出す人々がいます。」(14)
「アロンは兄弟の前で姉妹を支持します。けれども・・・彼女はふたたび語ることはないし、荒れ野の物語で主要な役割を担うこともありません。」(15)
「民衆の支持」「民は、ミリアムが彼らの元に戻るまで出発しようとしなかった。・・・神は民に移動するようにと語り、モーセも彼らに移動するように告げました。しかし、民はミリアムが戻るまで動こうとしませんでした。」(16)
「二つの文章の間になんのつながりも作ってはならないと示唆しているかのようです。し

かし、この二つをつなげてみると、大事なことをわたしたちは学ぶのです。・・・自然がミリアムの死に反応しているのです。反応はただちに起こり、しかも深刻です。自然が喪に服しているのです。砂漠の泉が干上がりました。ナイル河岸で弟の守り手であり、海の勝利におけるリーダーであったミリアムは、いのちのシンボルでした。したがって、いのちの水が彼女の死に弔意を表すのは、なんとふさわしいことでしょう。イズラエルの民と同様、自然も彼女に弔意を表したことになります。」(18)

（３）神の国の平等主義と制度化

８．創世記の原初史物語における男女（アダムとエバ）
　　手段としてではなく、パートナー（助ける者）として
　　文明と男女関係の歪み（支配－被支配の構造）

９．P・トリブル「イヴとアダム――創世記二―三章再読」（キャロル・クライスト、ジュディス・プラスカウ『女性解放とキリスト教』新教出版社）

10. イエスと女性：徹底的な平等主義、女性の弟子を伴った宗教活動（旅）
　　↓　　スキャンダル
　最初期の教会共同体における女性の指導的な役割

11.「家の教会」から制度化された教会へ（急速に）。家父長的社会の中の教会。
　制度化は安定した宗教としての持続性には不可欠であるが、本来の宗教的な理念としばしば緊張関係にある。

＜聖書テキスト＞

１．「2:18　主なる神は言われた。「人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう。」19 主なる神は、野のあらゆる獣、空のあらゆる鳥を土で形づくり、人のところへ持って来て、人がそれぞれをどう呼ぶか見ておられた。人が呼ぶと、それはすべて、生き物の名となった。20　人はあらゆる家畜、空の鳥、野のあらゆる獣に名を付けたが、自分に合う助ける者は見つけることができなかった。21　主なる神はそこで、人を深い眠りに落とされた。人が眠り込むと、あばら骨の一部を抜き取り、その跡を肉でふさがれた。
22　そして、人から抜き取ったあばら骨で女を造り上げられた。主なる神が彼女を人のところへ連れて来られると、23 人は言った。「ついに、これこそ／わたしの骨の骨／わたしの肉の肉。これをこそ、女（イシャー）と呼ぼう／まさに、男（イシュ）から取られたものだから。」24 こういうわけで、男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる。」（創世記）

２．「8:1　すぐその後、イエスは神の国を宣べ伝え、その福音を告げ知らせながら、町や村を巡って旅を続けられた。十二人も一緒だった。　2 悪霊を追い出して病気をいやしていただいた何人かの婦人たち、すなわち、七つの悪霊を追い出していただいたマグダラの女と呼ばれるマリア、3 ヘロデの家令クザの妻ヨハナ、それにスサンナ、そのほか多くの婦人たちも一緒であった。彼女たちは、自分の持ち物を出し合って、一行に奉仕していた。」（ルカ）

３．「3:28 そこではもはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです。」（ガラテヤ）

４．「12:13　つまり、一つの霊によって、わたしたちは、ユダヤ人であろうとギリシア人であろうと、奴隷であろうと自由な身分の者であろうと、皆一つの体となるために洗礼を受け、皆一つの霊をのませてもらったのです。」（コリントI）

５．「11:1　わたしがキリストに倣う者であるように、あなたがたもこのわたしに倣う者となりなさい。2 あなたがたが、何かにつけわたしを思い出し、わたしがあなたがたに伝えたとおりに、伝えられた教えを守っているのは、立派だと思います。3 ここであなたがた

に知っておいてほしいのは、すべての男の頭はキリスト、女の頭は男、そしてキリストの頭は神であるということです。4 男はだれでも祈ったり、預言したりする際に、頭に物をかぶるなら、自分の頭を侮辱することになります。5 女はだれでも祈ったり、預言したりする際に、頭に物をかぶらないなら、その頭を侮辱することになります。それは、髪の毛をそり落としたのと同じだからです。6 女が頭に物をかぶらないなら、髪の毛を切ってしまいなさい。女にとって髪の毛を切ったり、そり落としたりするのが恥ずかしいことなら、頭に物をかぶるべきです。7 男は神の姿と栄光を映す者ですから、頭に物をかぶるべきではありません。しかし、女は男の栄光を映す者です。8 というのは、男が女から出て来たのではなく、女が男から出て来たのだし、9 男が女のために造られたのではなく、女が男のために造られたのだからです。10　だから、女は天使たちのために、頭に力の印をかぶるべきです。11　いずれにせよ、主においては、男なしに女はなく、女なしに男はありません。12　それは女が男から出たように、男も女から生まれ、また、すべてのものが神から出ているからです。13 自分で判断しなさい。女が頭に何もかぶらないで神に祈るのが、ふさわしいかどうか。」（コリントI）

＜参考文献＞

１．メアリ・デイリー『教会と第二の性』未来社。

２．エリザベス・シュスラー・フィオレンツァ『彼女を記念して――フェミニスト神学によるキリスト教起源の再構築』日本基督教団出版局。『知恵なる神の開かれた家』新教出版社。

Elizabeth Schüssler Fiorenza, *Jesus. Miriam's Child, Sophia's Prophet. Critical Issues in Feminist Christology*, Continuum, 1994.

３．R=R・リューサー『人間解放の神学』『性差別と神の語りかけ――フェミニスト神学の試み』新教出版社。

４．キャロル・クライスト、ジュディス・プラスカウ『女性解放とキリスト教』新教出版社。

５．荒井献『新約聖書の女性観』岩波書店。

６．バルト『キリスト教倫理Ⅰ・Ⅱ』新教出版社。

７．大越愛子『女性と宗教』岩波書店。『フェミニズム入門』ちくま新書。

８．関根清三編『性と結婚』（講座　現代キリスト教倫理２）日本基督教団出版局。

９．芦名定道・土井健司・辻学『現代を生きるキリスト教』教文館。